

は通信兵器不足の爲二號無線機二其の他四號五號等の無線機を引揚
げらる

軍の作戦上最も痛心したるは彈藥にして特に對戦車戦闘用の爆藥は
當初皆無なりしが開戦前迄に約二噸の補給を受け應急の所要に充つ
ることを得たり（補給豫定量は約十噸なり）。

第二節 蘇聯参戦以後の状況

一、参戦直前の蘇聯及外蒙の状況

開戦迄^{（夏）}正面中外蒙に於ては外蒙側國境警備隊以外の大兵力を認めず。
開戦後侵入せる蘇軍は滿洲里・カリムスカヤ以西地區のサバイカル
方面軍にして開戦直前に軍正面に進出せるものゝ如し。

六月中旬頃より情報面に於ては外蒙軍兵力集結の状況若干現はれ來
りし程度にして東部正面に比し顯著ならざりしも七月中旬頃より
自動車の運行頻繁となり且從來見られざりし外蒙より自動車を以て
する内蒙への越境頻繁となり何等かの偵察企圖を有するものと判断

0581

せられたり。

又五月下旬より外蒙よりする武装謀者の満内越境侵入頻繁となり軍の配置に伴ひ更に活潑化せる如く感ぜらる。武装謀者は日本軍の軍服を着用し且無線を携行し満内深く約百軒に亘り侵入せるものあり。

五月中旬第百七師團正面に於て武装謀者の爲國境監視隊の兵五名中三名殺害二名拉致せられたる事件ありしも此の武装謀者は六月下旬満洲國國境警察隊に逮捕せられたり。

東部正面に指向を豫想せられし蘇軍の兵力は狙撃約八箇師團、戦車二箇師團、飛行機約一千機と判断せられたり。蘇軍参戦直前に於て

も軍の正面國境近く集中又け展開せる如き徴候は全然見受けられず然れども八月九日拂曉第百七師團正面阿爾山國境に展開せる敵が生文により一攻撃準備が出来たら攻撃を開始せよと命令せるが如き或は作戦開始後通遼方面に於て水陸兩用戦車を先頭に我の作爲せる氾濫を踏破し又新民附近に於ける大遼河の渡河に之を使用せし等よ

二 蘇聯參戰當時の情況

り觀て相當の準備を行ひありたりと認めらるゝ點あり。

八八

ノ八月九日二時第三方面軍司令部より黒河、東寧、虎頭、滿洲里正面よりの蘇軍の侵入及牡丹江、哈爾濱、滿洲里、海拉爾、新京等の爆撃せられたる情報に接し蘇聯の開戦を知り直ちに隸下各兵團及諸部隊に情報を傳達すると共に緊急態勢に入り、次で三時全滿に防衛を下令せらるゝに及び軍は平時よりの計畫に従ひ即時戦時防衛下令を命令し管内に於ける滿洲國軍、警察、憲兵を防衛に關し軍の指揮下に入れ完全に戦闘態勢に入る。

2. 五時第七師團參謀長より「阿爾山正面に於ける敵は戦車を有する狙撃約一箇師團にして逐次其の兵力は増加しつつあり又三國山南側地區より敵戦車數十輛國境を突破して師團後方に迂回しつつあり陣地前に展開しある敵の無線によれば準備完了次第攻撃前進すべく命令しあり、師團は蘇軍の眞面目なる攻撃と判断し當面の敵

0583

を陣前に撃破する。旨電話を以て報告あり。

3. 右の外九日中に知り得たる軍正面に於ける敵情左の如し

(イ) 東ウヂムチン―突泉(體泉)―道上を戦車及自動車約千輛東進中。

(ロ) 戦闘機三機に上空を掩護せられたる機甲部隊(戦車、自動車約

一千輛)ウヂムチン―開魯道上を東南進中。

(ハ) 外蒙騎兵約一箇師團ウヂムチン―林西道上を南進中。

(ニ) 尙西部正面に於ける敵情中軍の知り得たるものハ吉拉林―海拉

爾道上を南下せる敵機械化約一箇師團、滿洲里―海拉爾道上

を東進する敵機約二箇師團なるものハ如し。

又軍け方面軍に對し軍正面の敵情を空中偵察により續行せられん事

を要求すると共に右情報に基き洮南にありし獨立速射砲第二十九

大隊を第百十七師團に配屬し同師團をして突泉方面に於ける敵

軍部隊撃破の準備をなさしむると共に情報の収集を要求す。

第六十三師團に對しては平時計畫に基き開魯附近の橋梁の破壊及

汎濫を機を失せず作爲する如く命令す。

九〇

第三方面軍より偵察機二機連絡用として軍に配屬せられ四平飛行場に位置せしむ。

軍は第百七師團とけ有線、無線により連絡を確保するに努めたるも無線は全然應答なく軍より放送を行ふの外なかりき。

三爾後の作戦経過

二十日敵情に關しては大なる變化なく、第百七師團正面の敵は約二箇師團の如きも攻撃積極的ならず。東滿正面に於ては敵の突進急速にして既に移稜正面に近迫しつあり。海拉爾正面も既に敵の攻撃を受けつゝあり。又愛渾、虎頭正面は國境陣地にありて抗戦中にして盛んに挺進斬込つゝありとの情報に接す。

二十日九時頃軍は「第百七師團及第百十七師團及獨立戦車第九旅團を新京に轉進せしめ第三十軍司令官の指揮下に入らしめ、軍司令部、直轄部隊並に第六十三師團は奉天附近に轉進し又新に第百八

0585

師團及第百三十六師團、獨立混成第百三十旅團、戰車第一旅團を指揮下に入らしむべき」第三方面軍命令に接す。

軍は十時左の要旨の命令を各別命令を以て下達すると共に、鐵道輸送に關し齊々哈爾大鐵支那及錦洲大鐵支那と交渉を開始す。

第四十四軍命令の要旨

一第百七師團は現陣地に於て敵の前進を拒止したる後白阿線興安嶺隧道其他術工物を破壊して敵の前進を妨害し成るべく速かに新京附近に至り第三十軍司令官の指揮下に入るべし

二第百十七師團は一部を白城子附近に派遣して所要に應じ白阿線方面諸部隊の轉進を掩護し主力は速かに新京附近に至り第三十軍司令官の指揮下に入るべし

三第六十三師團は速かに奉天附近に轉進すべし工兵一中隊を鄭家屯に於て軍の直轄たらしむべし

四（直轄部隊以下略す）

十一時軍高級參謀は第百七師團參謀長に電話により直接命令を傳
達すると共に電報し、爾餘の兵團にも各々電話により命令を下達
す。第百七師團との電話は命令下達直后不通となりたり。尙念の
爲筆記命令を傳令により傳達せしめんとせるも當時既に白阿線は
白狼附近に於て敵戰車の爲遮斷せられ與安は敵の爆撃により炎上
しつゝ、あり且蒙古軍叛亂せる等の状況により之を中止せり。
尙軍は通信網の關係上平時より急を要する場合第百七師團に對し
關東軍より直接連絡する事を依頼しありたるが同師團との連絡は
杜絶せるを以て直接關東軍より連絡せられ度旨關東軍に連絡す。(後
日聞く處に據れば第百七師團の無線は受信器は異常なく軍の放送
を受け得たるも、發信器故障しありし由なり)。

3. 十日午后第百十七師團より敵戰車約千輛突泉方向に前進中にして
師團は歩兵一大隊及獨立遠射砲大隊を洮南西方約三十軒附近に派
遣し敵の前進を阻止せしむると共に洮南附近に兵力の集結を圖り

0587

つゝある旨の報告に接す。軍司令官は方面軍司令官より奉天に招致せられたるを以て代理として軍参謀長は十日午後軍司令部を出發四平に一泊の後飛行機により奉天に到る。

八月十一日洮南方面に突進中なりし敵戦車は洮南西方約五十軒の突泉を攻撃し縣公署等炎上中なるも防空電話を利用し連絡中との情報に接し、次で斥候の報告により同部隊は突泉に停止し前進の模様なきを知る。

軍は敵戦車部隊が興安附近に北上して第百七師團の退路を遮断せんとするや又は補給整備の上洮南に向ひ突進せんと企圖するや不明なるも、何れにしても軍の轉進に重大たる支障を與ふるものなる事を憂慮し、第三方面軍司令部に航空攻撃を要求す。第三方面軍より敵機甲部隊を第百十七師團をして攻撃せしめ然る後離脱せしめよとの指示ありたるも、攻撃せば師團の整備たる轉進は不可能となるにつき一部を以て敵の前進を拒止し主力は速かに敵を

0588

の離脱を圖るべく第百十七師團を指導す。尙第百十七師團に對し
 轉進に際しては洮南附近の飛行場及燃料の破壊焼却軍事營造物を
 破壊し敵の利用を妨げる如く指示す。

第百十七師團正面に於ける敵情は全く不明なるも、第百六十三師團正
 面の敵の行動は緩慢にして同師團は尙敵と接觸するに至らず。第
 百六十三師團は新開河橋梁を破壊し且氾濫を作成す。

興安憲兵隊長より「白阿線既に白狼附近に於て遮斷せられ且敵部
 隊逐次興安に接近しあるを以て速かに後退の命令を出され度き」
 旨の電話あり。興安軍官學校の叛亂及爆撃にて治安混亂しある際
 憲兵先づ後退するは適當ならざると軍は防衛に關してのみ憲兵隊
 を指揮しあるを以て新京憲兵司令官の指示を受くる如く回答せる
 も、新京憲兵司令部よりは各軍に配屬せりとの事なり。軍は憲兵
 隊の配屬に關しては何等の通報命令にも接せざりしを以て後退に
 關しては該隊長の獨斷に任す。

0589

5 八月十二日突泉の敵機甲部隊は依然停止しあり。

軍は齊々哈爾大鐵支部と兵團の輸送に關し配車を極力交渉せるも第百十七師團の爲の列車を配當し得ず、第六十三師團に對しては漸く錦州大鐵支部より列車を回送す。

軍は第六十三師團をして轉進に際し爾后に於ける敵との接觸の爲馬匹及無線を裝備する約十名よりなる將校斥候三組を開魯一彰武新民一奉天道に沿ひ行動せしむる如く殘置せしむ。又幾に軍の直轄たらしめし工兵中隊に鄭家屯附近軍事造營物、鐵橋、驛等の破壊を準備せしむ。

十二日午後より第六十三師團主力は列車により通遼を出發す。通遼出發當時開魯に敵戰車部隊突入せるも開魯守備部隊は其れ以前に敵と離脱す。軍參謀長は奉天より鄭家屯に歸り、奉天附近防禦に關し軍司令官に報告する處あり。軍司令官は其の後方面軍差出の飛行機により高級參謀と共に奉天に向ふ。軍司令部は十二日夕

刻より列車搭載を開始す。同時頃に至るも第百十七師團の列車に
よる轉進の見込たゞず遂に同師團主力をして行軍によらしむる外
なきに至れり。

二十時頃在新京飛行團より連絡將校鄭家屯飛行場に飛來し、本日
午前突泉に出撃せるも目標発見不能なりし爲引歸せるも、明十三
日拂曉更に約二十五機を以て爆撃するを以て目標位置の指示あり
度との事にて細部を説明す。

軍參謀長は兵站參謀と共に最後の處置をなす爲鄭家屯に殘留し十
三日朝飛行機により出發する事に決す。二十一時頃興安特務機關
長後退し來り、第二遊撃隊は既に活動中にして又特務機關は計畫
に従ひ遊撃隊を實施する旨報告す。

6. 十二日二十三時軍司令部は鄭家屯を出發十三日午後奉天に到着、
直ちに奉天北西部被服會館に入り司令部を假設す。軍は既に偵察
せるところに基き、第六十三師團、第百三十六師團、獨立混成第

百三十旅團、戦車第一旅團を基幹として奉天附近防禦陣地の構築を開始す。尙第百八師團を遼陽附近に使用する爲軍の指揮下に入らしめらる。

十三日午前軍 高級参謀は第三方面軍司令部に出頭作戦訓令を受領す。同日午后に至り方面軍は鳳城、桓仁附近に轉進するの企圖を有し同時に方面軍通信参謀を偵察並に準備の爲桓仁附近に出發せしめたるを知る。

尙奉天に到着後方面軍は在奉天部隊の殆んど全部を軍の指揮下に配屬せるも、此等の部隊の指揮單位數は尨大にして（約七十餘）掌握極めて困難、中には其の位置も判然せざるものあり。

7. 十四日軍は依然方面軍の訓令に基き作戦準備を續行中、十二時第三方面軍高級参謀より全面的停戦を承知すると共に同日二十二時迄に作戦行動を停止せしむべき旨の口達命令を受領し、直ちに高級参謀を第三方面軍司令部に派遣し細部を連絡せしめ且方面軍司

令部通信網を通じ隷指揮下部隊に停戦命令を傳達す。

九八

十八時頃軍高級參謀より先刻の停戦命令を取消し依然作戦を繼續するとの方面軍命令の傳達あり、同時に明十五日正午重大放送ありとの連絡あり。

停戦命令或は取消命令と誠に重大事項の輕々たる發令に方面軍に理由を問合せたるところ、先の停戦命令は通化に在る大本營派遣參謀よりの連絡によりしものにして正式なるものにあらず、關東軍は依然作戦を繼續するとの事なり。全般に割切れぬ空氣にて夜を徹す。

四 終戦時の態勢

1. 第六十三師團主力は奉天東陵附近に陣地占領中
2. 第一百三十六師團主力奉天西部地區
3. 獨立混成第一百三十旅團主力 奉天北陵附近
4. 獨立戰車第一旅團 東陵附近

0593

5. 遊撃連隊 奉天西部地區

6. 高射砲部隊は對戰車戰闘準備の爲主力は奉天市内に位置す

7. 電信第三十一聯隊主力奉天北陵

8. 獨立野砲兵第十四大隊、野戰重砲兵第十七聯隊 昌圖

野戰重砲兵第三十聯隊、獨立重砲兵第六中隊 開原

獨立自動車第一一二大隊 鐵嶺

獨立輜重兵第七十三中隊、第四十七野戰道路隊、

建築勤務第四十中隊、特設陸上勤務第一二七中 奉天

隊、白城子陸軍病院、海拉爾第二陸軍病院

9. 第百八師團

遼陽附近

五 彼我の損害

敵に與えたる損害

(1) 阿爾山正面に於ては敵に相當の損害を與えたるもの、如きも細

部不明

(ロ) 突泉（禮泉）の敵機甲部隊の爆撃により敵戦車約十數輛を破壊
せるものゝ如し

2. 我方の損害

(イ) 第百七師團 戦死千餘名（札資特旗に於ける百七師團停戦時
に於ける調査）

(ロ) 第六十三師團 戦死數名

(ハ) 其の他白狼附近伐採隊に損害ありし如きも不明なり。

六 終戦時の状況

1. 軍に屬する各部隊は一部輸送車^中の部隊を除き殆んど奉天周邊地區に
集結したるも、各兵團は何れも新配備につく途上にあり、隸指揮
下部隊中第六十三師團と第百八師團を除き殆んど新編成部隊にし
て裝備はもとより未だ編成途上の部隊もありて其の戦力は二分の
一以下なりき。

2. 十五日正午軍は放送により終戦を確認せるを以て、通遼、新民、

遼源附近に殘置せる斥候、興安特務機關、第二遊撃隊に停戦命令傳達せるに努めたるも、興安特務機關及第二遊撃隊は其の所在判明せず。

斥候よりの報告により蘇軍は既に鄭家屯、通遼に達しあるを知る。

停戦の放送ありし後なるにも拘らず、奉天市内の輿車壕構築は依然續行すべく命令せられ又滿東軍は大本營よりの命令あらざるに より依然作戦を續行する等と伝えられ、去就に迷ふが如き状態を生ぜるも、軍は放送の趣旨により戦闘行動を停止するに變化なし。

3. 十六日豫め計畫せる處に従ひ司令部を奉天市内朝日女學校に移轉す。軍司令官、參謀長は方面軍司令官、滿洲國第一軍管區司令官王上將、奉天省次長源田松三等と新情勢下に於ける治安の維持等につき協議す。又第四十四軍司令部は奉天省防衛司令部となり奉天附近に於ける全日本軍戦列部隊及兵站部隊を軍の指揮下に入らしめらる。

0596

第百八師團は遼陽附近に轉進中にして錦州の治安状態不良との報告あり。當時錦州の兵力は歩兵一中隊を基幹とせるものに過ぎず北支に轉戦中なりし滿洲國軍約一万集結しありて叛亂の危険大なりしを以て、軍は居留民保護の爲第六十三師團の一大隊を急派すると共に第一軍管區司令官より滿軍部隊の鎮壓に努むべきを依頼す。

又十七日錦州附近の治安状態依然險悪なりしも滿軍叛亂の危険は若干減少せるもの、如し。

方面軍より滿鐵、電々、電業等滿洲特殊會社關係者の召集解除次第で滿洲に家族を有する者の召集解除並に軍屬の解雇を通告せられ、同日附を以て軍隷下諸部隊の上記召集者を解除す。尙軍紀維持の爲軍法は依然嚴存し軍紀に反するものは處罰せらるゝ旨布告あり。又十八日錦州の治安は概ね平靜に移行しつつありしも、奉天市内處々掠奪ありしを以て兵力(戦車)を派遣し暴民を鎮壓す。

0597

諸情報を綜合するに通遼方向より奉天に向ひつゝありし蘇軍機甲部隊は十九日夕刻奉天に到着するの巨難に在りしを以て、蘇軍進駐の際に奉天西郊地區に駐せしめ混亂を防止し度き考に基き奉天鐵西地區に宿舍を準備す。軍司令部は書類の焼却を行ふ。第六十三師團より派遣せる斥候歸還す。損害は兵五名なり。同斥候の報告により蘇軍の情况及興安特務機關が停戦を知り法庫附近に集結せるを知る。

6 十九日關東軍司令部より七月十七日附陸密第一四四一五號による終戦により敵手に歸したる軍人軍屬の取扱に關しては國際法上多少の疑義あるも國內的には法律的にも道義的にも捕虜として取扱はざる旨命令あり。又關東軍總參謀長の蘇軍との停戦交渉に關する協定内容を通報し來る。

十九日十一時頃蘇軍を使フリツトラ少將は通譯女子大尉及補佐官中佐二名を帶同して奉天北飛行場に到着。其際恰も日本に向け飛

行する爲通化より同飛行場に来り休憩中の滿洲國皇帝一行は滿洲
飛行機會社休憩室二階にて休憩中なりしが帝室御用掛たる吉岡安
直中將用便の爲階下に来りしを發見せられ直ちに飛行機にて蘇領
に送られたり。

其の後軍使一行は第三方面軍出迎えの志位少佐と共に方面軍司令
部に來る。第三方面軍司令部に於ては第三方面軍司令官及幕僚、
第四十四軍司令官及幕僚等會同し停戦後の交渉に入る。

此の日の交渉に於ては蘇軍々使は武装解除、軍隊移動の禁止及鐵
道運行の停止、通信の蘇軍監視等を要求す。

武装解除は奉天周邊の日本軍部隊は三分の一の自衛兵器を保有し
（此の點は治安不良により日本軍側より要求）、他の兵器は全て
各部隊の所在地にて引渡すことゝなれり。

蘇軍機甲部隊は十八時頃奉天西郊に到着し豫め準備せる宿舎に入る。

7. 二十日九時頃より前日の如く第三方面軍司令部に於て交渉を再開

するや蘇軍々使より、奉天市附近の日本軍部を以て軍司令部以上の司令部及治安維持のため特別警備隊のみを残置し他は全て三時間以内に奉天北方十六軒の線以北に移動集結すべき要あり。軍司令官は實施不可能なる旨を主張し且特別警備隊のみは武装を解除することなく治安維持に方り且残置兵器監視の爲各部隊所要の人員を残置することを要望し、接衝の結果部隊の移動は六時間以内に他は我方主張の如く認めらる。蘇軍は自ら鐵道、通信機關の接收を開始し宿舎を徵發す。又市内を通行する日本軍自動車は乗用車貨車の區別なく其の場に於て隨時蘇軍兵に徵發せられ、馬匹も亦同様に押えられ其の儘滿洲國人に賣却せらるゝ如き状況を現出す。兵器は逐次自動車により蘇軍は接收せるも途中滿人に小銃彈藥等を與へし爲日本軍兵力の撤退と共に治安は俄然悪化し諸所に暴民の掠奪暴行始まり收拾不可能の状態に入る。

此れより先蘇軍より在奉天將官を第三方面軍司令部に集合せしむ

る如く要求あり。十一時頃第三方面軍司令官より軍使に對し各將
官の紹介ありたる後軍使は蘇軍極東軍司令官奉天北飛行場に到着
せらるゝを以て全員出迎せられ度と稱し直ちに自動車に分乗方面
軍司令部を出發せるも其の後將官は夕刻に至るも歸還せず、
しありたる處方面軍司令官の自動車運轉手逃げ歸り始めて全將官
は蘇軍飛行機により何處かへ拉致せられたるを知る。當時第三方
面軍兵器部長は病氣の爲又工兵司令官平野少將は集合を知らざり
し爲何れも居残り。此れが爲第三方面軍は司令官代理に工兵司
令官平野少將を、第四十四軍は司令官代理に兵器部長竹林大佐を
以てす。

夕刻蘇軍は方面軍司令部を兵舎に使用するを以て即刻移動すべく
要求せるを以て、大山會館に方面軍司令部を移動す。

。八二十一日奉天附近の治安状態は極めて不良となり、特別警備隊の
約一中隊は奉天驛前にて治安警備中滿人の掠奪を鎮壓せんとした

0601

る際蘇軍戦車部隊の爲に包圍せらる。急報により方面軍司令部は蘇軍に交渉せるも結局武装を解除せられて包圍を解かれたり。

第一特別警備隊高級参謀大森大佐は、蘇軍の我に約せる所に違反し且將官等の騙し討的拉致等の状況に鑑み日本軍部隊の將來は如何様になるやも知れざるを以て、速かに特別警備隊の全兵力を干代田公園に集結し一戦も已むなしと軍司令部に決心を要求し來る。

是は、蘇軍事態の重大化に第三方面軍司令部にて緊急會議を開きたる結果、武装を解除せられたる現在一戦を交えたる結果は火を見るより明かにして其の悪影響圖り知れざるにより一部の現象は忍び難く情勢の推移を見るに決し、部隊の集結を取止めしむ。同日夕第三方面軍は特別警備隊武装解除は協定違反なることを交渉せるも蘇軍側より爾後の市内警備は蘇軍側にて擔當し、特別警備隊は三分の一の自衛兵器のみを有し殘餘を武装解除し文官屯附近に集結すべく要求せらる。更に此の日蘇軍狙撃師團奉天に進駐し來る。

奉天附近の兵站諸廠の倉庫は凡て蘇軍の管理下に入るも、文官屯南滿造兵廠及航空廠は蘇軍兵器の修理業務に従事す。

在留日本人より蘇軍の掠奪暴行を阻止する如く陳情切りなるも、蘇軍に交渉せるも何等の對策も講ぜられず。

9. 二十二日午後蘇軍兵二名拳銃を持ち軍司令部に侵入掠奪せるを以て、遂に衛兵之を射殺するに至る。軍は之を蘇軍側に通告し蘇軍衛戍司令官ブリツトラ少將直ちに現場檢證に來りしも非は彼にありしを以て何等處置なく歸る。

東陵附近に在りし戰車部隊の内約一中隊蘇軍側に酷使せられ鞭打たる等の報告ありしを以て第三方面軍司令部を通じ蘇軍に再三交渉せるも効果なし。

10. 二十三日軍司令部は舊南滿造兵廠奉天事務所に移轉し其の跡には蘇軍約一箇聯隊入る。

奉天北方に移動せる部隊と連絡せんとして通信線を架設せるも全

0603

て切斷せられ、連絡は徒歩傳令による外なかりしも途中は極めて危険なり。

11. 二十五日第三方面軍は奉天附近日本軍の收容所偵察を蘇軍側と共に開始す。

12. 二十九日在奉天部隊は全て北陵に集結すべきを命ぜられ、軍は軍屬を解散し、北陵收容所に入る準備をなす。

13. 三十日軍司令部主力は同行を希望する女子軍屬若干と共に北陵收容所に入る。

三十一日軍司令部の殘部は北陵收容所に入る。

北陵收容所に收容せられし兵力は先に奉天地區に移動せしめられたる部隊及奉天市内に散在せる通過軍人及南滿造兵廠（蘇軍兵器修理に従事）を除く補給諸廠の軍人、軍屬（一部少年工等）等約二万五千名にして、滿鐵鐵路學院及滿東軍通信教育隊に收容せらる。

14. 九月五日頃迄に安東及撫順、本溪湖附近の部隊行軍により北陵收容所に入る。

15. 九月十日軍籍に在りたる一校市民（奉天）約六千名北陵收容所に收容せらる。

16. 九月十四日より作業大隊の編成（一大隊千名）及輸送を開始し同日より毎日三箇列車宛奉天より北上す。一箇列車は約千五百名にして一箇大隊の装備は個人装備の外自動貨車二、繡重車五、馬匹六なり。

セ其の他の状況

1. 在留邦人、開拓團の状況

軍は八月十日轉進命令を受領すると共に在留邦人も後送せしむべき指示に接し、直ちに在鄭家屯滿洲國興安總省連絡參事官及當時防衛對策等の爲集合しありたる興安西省各旗參事官に對し軍司令部に集合を求め一設情況を説明し、十二日中に在留邦人及開拓團

0605

員を鐵道沿線に集合せしめて後退する爲の處置をとらん事を要望し、列車の配當は軍司令部に於て擔當し且奥地等にて傳達遅延せざるものは集結遅れたる場合に於ても軍用列車に便乗せしむる旨附加し迅速なる處置を執らしむると共に、各兵團にも連絡して此の趣旨を徹底す。四洮線沿線附近の居留民は十二日引揚列車により或は軍用列車により通化方面に後退せるも、奥地の居留民は連絡遅延の爲列車によるを得ず、各機關の判斷に基き徒歩により後退せるも、興安附近居留民は徒歩により後退中蘇軍に遭遇し多數の犠牲者を生ぜるもの、如く、興安西省奥地の居留民は徒歩により奉天附近に後退す。

軍人軍屬の家族は軍司令部の家族は四平及鄭家屯に、第百七師團の家族は阿爾山、五叉溝附近に在りしが、前線の家族は戦闘開始と共に一般居留民と共に列車により鐵道遮斷の直前に後退し得たり。軍司令部の家族は鄭家屯附近居留民と共に通化に後退し停戦

0606

後撫順に移動す。

2. 滿洲國政府機關の状況

開戦後戦況逼迫に伴ひ諸所に叛亂起りしと以前より國民政府と氣脈を通じありし滿系官吏は全く活動せず保身にのみ追はれ完全に無政府状態となる。日系官吏特に蒙古地帯に在りし參事官等は情報の傳達、遊撃活動、居留民の指導に身を挺して活動せり。

3. 滿洲國軍及警察の状況

滿洲國軍は開戦前情勢の急迫に伴ひ逐次其の兵種を制限し大部を工兵、輜重兵に改編し、其の裝備も弱体化し兵器は日本軍に移管しつゝありしが、開戦と共に逃亡者續出し爲に日系軍官の多數は殺害さるゝに至れり。在興安蒙古軍官學校の如きは強め叛亂を計畫しありしものゝ如く、九日興安の爆發せらるゝや直ちに叛亂して興安軍司令官を逮捕逃亡す。十五日停戦となるや日系軍官は全部其の職を滿系軍官と交代す。南滿に於ては相當險惡なる空氣あり。

0607

りて特に錦州にありては極めて情勢悪化せざるも満軍高射砲部隊の逃亡ありしのみにして叛亂は見られず。警察官も満系は開戦と共に保身の爲逃亡せる者多かりしも、日系警察官は相當活躍し、特に治安の維持、蘇軍の情報提供等に最後迄活躍せり。

ハ満人、鮮人、露人等の状況

満人

情勢の緊迫に伴ひ物資の供出、人員の徴用等により民心は完全に離反し徴用の身代り、供出損害の共同負擔等行はれ且國民政府に通じて身の安全を圖らんとするもの多く民心の動向は警戒を要するものありしが、八月十五日停戦の報傳るや奉天城内は忽ちにして全戸青天白日旗を掲げ、十七日頃より満軍の逃亡叛亂と共に漸次治安状態不良となり日本人財産の掠奪を開始し暴行事件惹起するも尙日本軍嚴存しありたる間は治安を保持しありたり。十九日蘇軍入城し日本軍の兵器を暴民に與ふるに及び俄然暴動化し、北

0608

陵附近に於ては日本軍(殘存部隊)と對峙し小銃等を以て攻撃し來り
手榴彈等を以て之を撃退する等の如き狀況を呈す。

奉天驛前附近は最も治安不良にして二十一日よりは避難民及通行
人は凡て掠奪暴行を受け又日本憲兵舎、官舎及日本人立退家屋
は一物も殘さず掠奪を受く。平素日本人上官に對し反感を有せる
滿人警察官は蘇軍入城と共に日本人警察官を逮捕し拷問を行ふ。
日本軍の奉天北方に撤退するに及び連絡の爲の通信線は全て滿人
の切斷する處となり又奉天、撫順間には匪賊出沒するに至る。日
本人に好意を有せる一部滿人中には日本人を保護し或は便宜を與
えたるものありしも極めて僅少なり。

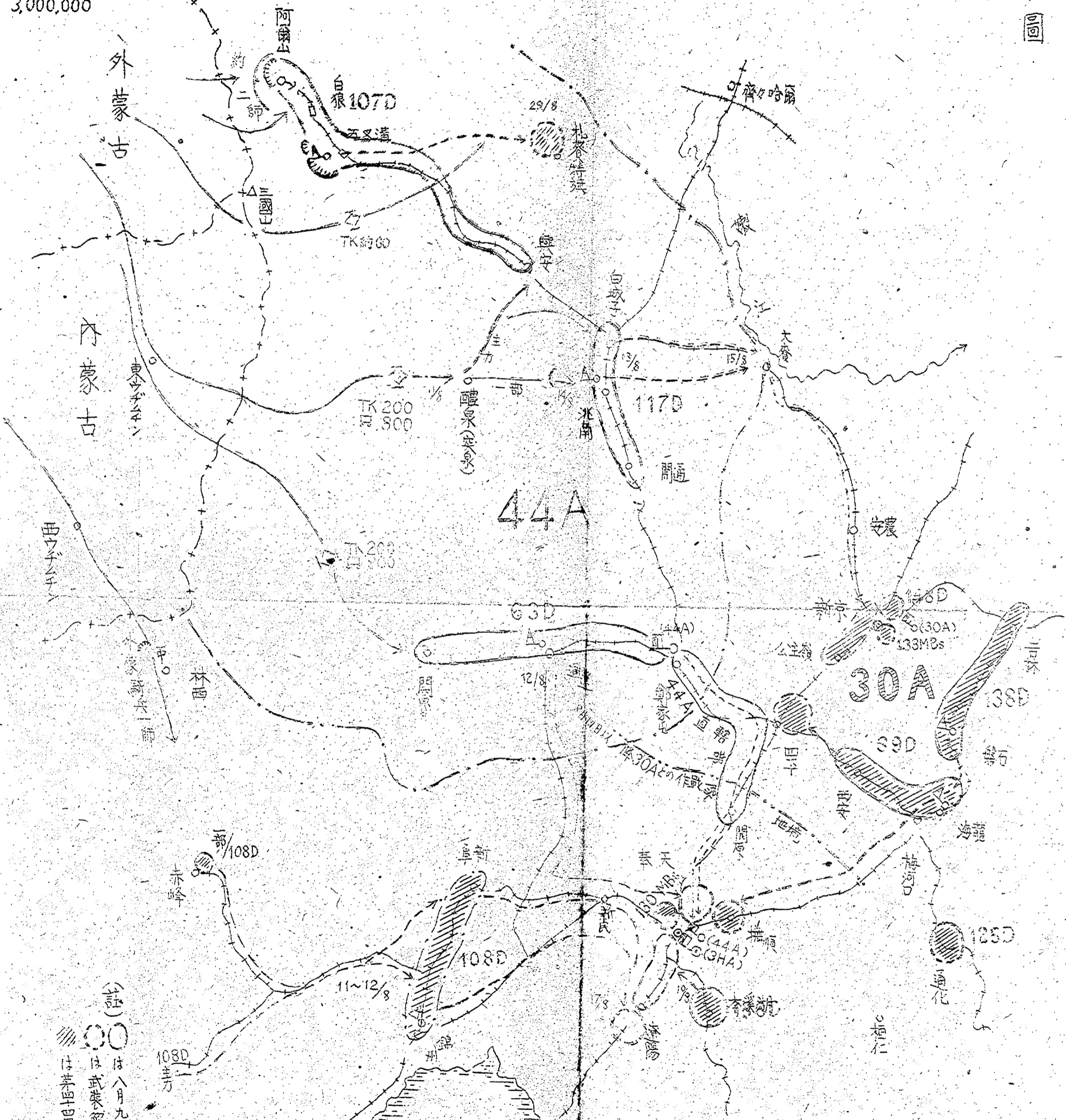
朝鮮人

停戰當初は滿人の報復を恐れありしも朝鮮國旗を掲げ、蘇軍入城
するや蘇軍掠奪の先導者となり日本人より掠奪せり。又蘇軍の爲
謀者となり密告する者多かりき。

第四十四軍作戰經過要圖 (開戦より武装解除迄)

附圖

1
3,000,000



(註)
 ○ は八月九日の位置
 ⊙ は武装解除の位置
 ⊖ は第四十四軍の位置

開戦時
 44A 兵力
 63D
 107D
 117D
 9TKBs
 17SA
 29TA
 31TL
 19補給隊

轉進中の兵力
 107D
 117D
 9TKBs
 19補給隊

終戦時
 44A 兵力
 63D
 108D
 136D
 130MBs
 17KBs
 22AA
 1特務隊
 19補給隊
 各補給隊

露人

全波戦局の不利に伴ひ在滿白系露人は蘇聯の工作により漸次蘇聯國籍を取得せるものを生じ、且諜報活動も活発化するに至る。蘇軍人城と共に日本軍側に協力しありし者の一部は天津、上海に逃亡せるも、大部分は逮捕せられ白系露人事務局員は全部銃殺せらる。又白系の一部は蘇軍の密偵となり積極的に蘇軍に協力せるも、結局大部の白系露人は蘇領に護送せられ叛逆人として殆んど處刑せられたるものゝ如し。

第三節 第六十三師團の状況

一、北支より滿洲への轉進

要旨

63Dは司令部を北京に置き北支那方面軍直轄の下に在石門の獨立旅團を併せ指揮して河北省燕京道、保定道及北部順德道地區の警備に任じありしが、昭和二十年初頭夫々北京及保定に於て新に編成

せし獨立警備隊に其の警備を移譲し同年五月北京及保定地區に集結し轉進準備及訓練の後同年六月上旬企圖を秘匿しつゝ、滿洲國通邊地區に轉進す。

2 轉進準備

(イ) 警備の移譲

師團は昭和十八年七月北京に於て編成以來所謂分散配置に依り警備に任しありしが、昭和二十年三月師團の擔任の下に夫々北京及保定に於て編成せし獨立警備隊の編成完結するや同年四月上旬師團隷下部隊の警備の配置を概ね其の儘兩隊に移譲し當初若干期間重複警備の後隷下部隊を北京及保定地區に集結す。但し師團は依然警備任務を有し兩警備隊は師團の指揮下に入らしめられあり。

(ロ) 師團の編制改正

師團は所謂警備師團にして、歩兵二旅團（旅團は獨立歩兵大隊四一工兵隊一及輜重隊一並に野戰病院一より成りしを以て野戰

師團としては不備の點多く特に砲兵力及機動力に欠くる所あり。依つて先づ砲兵一隊（野砲四門）の編成を命ぜられ更に各隊の行李を編成す

(イ) 師團の教育訓練

師團は編成以來分散配置に依り警備任務に服しありしを以て野戰師團とは日常の戰闘様式に著しき相違あり。歩兵各級隊長の如きは編成以來一回も其の部下全員を集合掌握せしことなき狀況にあり。依つて師團は獨立警備隊に固定警備配置を移讓するや隸下部隊を集結し兩歩兵旅團長掌握下各々警備地區内の活潑なる機動討伐を實施せしめ以て警備任務の積極的遂行と共に特に此の間に於て各級指揮官の指揮能力の向上、各部隊の機動、戰闘等野戰的訓練を實施し更に師團司令部以下各特科隊も夫々活潑なる野戰訓練を實施す。

(ロ) 滿洲への進實施

昭和二十年六月上旬師團は北支に於ける籌備任務を解かれ滿洲
國通遼地區に轉進を命せられ國境通過時を以て獨東軍の戦闘序
列に入らしめらる。本轉進に方りては特に企圖の秘匿に努め準
備時期より鐵道輸送實施に至る迄万全を期し能く所期の目的を
達し順調に轉進を實施し六月中旬新駐地に轉進を完了す。

二 滿洲轉進より蘇聯參戰迄の狀況

1. 要旨

師團は滿洲轉進に依り第四十四軍の隸下に入り、司令部を通遼に
置き鄭家屯―通遼鐵道線沿線の主要地（住民地）打通線北部及開
魯に駐屯し直ちに訓練に邁進す

次て新作戦任務を受領し師團は之に基き作戰準備に没頭す。

右準備は有ゆる困難を克服して銳意之か完整に努め相當の進歩を
見たる際蘇聯の參戰を迎えたり。

2. 移駐後の配置

師團司令部

通遼

66B

主力を以て鄭家屯、一部を以て同地以西鄭家屯、通遼線の沿線主要住民地

67B

主力を以て通遼、一部を以て同地南方打通線沿線の主要住民地

尙歩兵一大隊を開魯に駐屯す

爾餘の部隊

通遼附近及鄭家屯、通遼線沿線住民地

3. 作戰準備の状況

(1) 師團の任務

六月下旬軍より爾後の作戰に關し命令あり師團の任務左の如し。

師團は主力を以て通遼附近、各一部を以て開魯、鄭家屯、通遼

線上の主要地、特に鄭家屯附近に陣地を占領し遊撃戰法に依り

所在に敵の東進を擊碎す。

(2) 兵力部署

0615

現駐屯配置を骨幹とせるものにして大なる變更なし。

(イ) 陣地構築

師團移駐後の新作戦任務に應ずる陣地の迅速なる完成は師團の夙に着意せる所にして居住設備の如きは眞に最少限に止め前述べ戦任務を受領するや直ちに偵察、構築に着手せり。之が構築は所在の物料を以てする如く指示せられ軍より何等の補給を受けざりしを以て、一帯の沙漠地帯にして利用すべきもの無き師團は洞窟陣地の如き徹底せる工事は直ちに着手するに由なきも沙漠地の特性に鑑み先づ個人壕（たこ壺）を主体とするものに依り相當の強度の陣地を構築し爾後逐次之を強化を圖ること、せり

(ロ) 資材の整備

兵器彈藥特に遊撃戦の爲の爆藥其の他の作戦資材は當初軍より補給なく教育訓練にも支障を來す状況にありしも逐次之を整備

を爲し得たり。

(其の他)

豫想作戰に應ずる編制裝備の改善強化等逐次實施す。

教育訓練

教育訓練は岸川師團長の特に意を用ひて努力せし所にして、北支に於ける轉進準備以來夙に着手しありし所なるも將來の作戰任務明らかとなるや直ちに之に應ずる教育訓練に着手せり。

即ち遊撃戰の教育を主体とし幹部に對しては更に指揮能力の向上に着意せり。

之か爲處置せし事項左の如し。

- (イ) 吉林演習（關東軍に於て木下機動旅團をして實施せしめたる遊撃戰の演習）に參謀長を參加せしめ隸下の指導に當らしむ
- (ロ) 鐵道を利用しモーターカーを走行せしめ敵戰車、裝甲車の實速を出し之に對し肉攻を訓練す

一三三
師團長陣頭に立ち連日各部隊の訓練を視察するのみならず自ら之を指導す

(二) 隷下各部隊は万難を排して連日訓練を実施する如く指導す
右の成果は着々之を擧げ得たり幸に師團は北支に於て共產軍匪の遊撃戦に相對し敵の逐年若心研究創意による日進月歩の同戦法に對抗しありし關係上、遊撃戦に就ては將兵を通し深刻に理解しありしを以て之か訓練も容易に成果を擧げ得たり。

5. 編制裝備

編制に就ては前述の如し。

裝備に就ては遊撃戦に應ずる裝備就中肉攻所要兵器資材（爆薬等を含む）の整備に努め蘇聯の参戦迄には概ね所期の如く完了せり。

6. 戦力

(1) 一般的觀察

師團は昭和十八年七月獨立混成第十五旅團を主体として改編せ

し警備師團にして且編成以來直ちに分散配置に依り警備任務に服し共産軍匪に對し對遊撃戰に従事しありしを以て近代戰に應ずる編制特に裝備を有せず、砲兵力は臨時編成の野砲一隊（四門）に過ぎず、對戰車火器の如き皆無の狀況なれば其の戦力は一受野戰師團に比し遙かに及ばざるものと判断しありたり。

加ふるに編成當時は幹部も相當優秀（獨立歩兵大隊長は現役大佐）なりしも滿洲轉進時に於ては著しく低下（同大隊長は特進の大尉級）しありて、師團の近代戰に應ずる戦力は標準師團の50%以下と思料す。

然れども軍の對蘇戰は徹底的に遊撃戰に終始せんとするものにして優秀なる指揮官の下、諸兵種の統合戦力を發揮し更に戰略戰術的運用の妙を以て勝を制せんとする正道の作戦に非ずして最下級幹部以下の實施する個々の遊撃戰闘の綜合戦果に勝敗の決を求めんとし司令部の如きも一度戰闘の開始後は全員が各々

一遊撃戦闘員たらんとする原始的作戦なれば、斯かる戦闘に於ては北支に於て連日連夜對遊撃戦に終始せし師團としては最も得意とする所にして其の戦力は本來の在滿兵團の追隨を許さざるものありと思料す。

尙師團の志氣は能く高揚しありたり。即師團は北支より他に轉用せらるゝことを昭和二十年初頭に承知せし以來いづれ決戦正面に於て玉碎するものと覺悟しあり其の滿洲轉進も亦其の覺悟を以てし寸暇を惜んで次期作戦の準備教育訓練に邁進しありたるを以て其の志氣は十分に高揚せられたり。

(四) 數量的觀察

a 師團は警備師團の編制に若干の野戰對應の改編を實施せしものにして總兵力は固有編制に應ずるものと殆んど差異なく北支に於ける損害の補充も亦行はれありて編制に應ずる完全なる定員を保有しありたり。

b 兵器亦指耗少く編成當時より精低下せる程度なり。彈藥資材は轉進時には最初の會戰用のものをも保有しあらざりしも蘇聯參戰時には相當充實しありたり。

三、蘇聯參戰當時及爾後の狀況

1. 師團は曩に示達せられたる作戰計畫に基き當時諸準備を完了しあり。師團の正面に對する敵の進入明らかとなるに及び既定計畫に依り先づ最前線の開魯に在りし獨立歩兵第七十七大隊をして將に遊撃部隊として進發せしめんとする際十日後退の命に接す。

2. 師團は前述の如く蘇聯參戰後、日ならずして現配備を撤し奉天東陵附近に陣地を占領して隣接兵團と共に奉天を守備すべき任務を受け、奉天に向ひ轉進す。

右移動は十二日午后より鐵道輸送に依り圓滑に實施せられ、最前線開魯の如きも敵の侵入に先たち離脱し得たり。但し居留民をも併せ後退する爲相當困難を感じたり。

3. 爾後逐次到着する部隊を以て陣地占領に着手し概ね師團半部を輸送せしとき停戦となる。

一三六

四 終戦時の状況

1. 態勢

師團は前述の如く未だ敵に觸接することなく軍命令に依り奉天に後退し、約半部は東陵附近に陣地占領、他半部は鐵道輸送中なり。

2. 戦力

蘇聯參戰前に同し

3. 武装解除の状況

八月十九日蘇側軍使飛行機に依り奉天に到着。八月二十日師團長は「蘇軍軍司令官の到着を迎ふる爲飛行場に集合すへき」指示を受け同様集合せる在奉天の全將官と共に飛行機に依り拉致せらる。爾後師團は一地に集合の上武装を解除せらる。

4. 爾後の推移

0622

其の後師團全員は北陵收容所に收容せられ此處に滞在十月中旬に至り入蘇の爲輸送を開始す

此際尉官以下は全部作業大隊に編成し（大隊は1500名）佐官は同收容所に在りし他兵團等のもつと合し將校大隊を編成し出發す。

但し第67旅團長橋場大佐は部下を思ひ自ら進んで作業大隊長となりて出發せり。師團は各作業大隊共佐官を以て隊長に充當せんとせしも、橋場大佐のみ出發し得たる外他は禁止せらる。

第四節 第百十七師團の状況

第一、蘇聯參戰迄の状況

昭和二十年五月下旬師團は新郷（北支）に於て滿洲洮南附近に轉進すべき命を受け六月中旬樞秘裡に行動を開始し六月末日迄に概ね輸送を完了す。（當時尙歩兵二個大隊は老河口作戰に参加中なり）

2 八月五日頃に於ける師團の態勢要圖第一の如し。

3. 八月六日第四十四軍の作戰計畫及之に基く陣地構成計畫等を受領し之に基く師團の計畫を立案中にして八月十日部隊長會同に依り示達すべく準備中なりき。

第二開戦より終戦時迄の状況

八月九日開戦と共に同地域に在る獨立速射砲第二十九大隊を師團の指揮下に入らしめらる。

2. 八月十日各部隊長を集合せしめ取敢えず陣地構築に關し命令す。

3. 同日體泉副隊長より「土民の言に依れば戦車數千台體泉方向に前進中」との情報を電話を以て通報し來りたるを以て、直ちに²⁰⁶大隊²⁹TASを洮南西方約三〇軒附近に前進せしめ敵の前進を阻止せしむる如く處置す。

八月十日午後電話に依り「第百十七師團は速かに新京に轉進し第三十軍の指揮下に入るべし、指揮轉移の時機は新京到着時とす、轉進の爲十二日夕より列車十二列車を配當す」の軍命令を受領し之

0624

が準備をなす。

5. 八月十一日早朝開通地區より 88 大隊を洮南に轉進せしめ該地區を
増強す

6. 十二日十八時頃軍より一列車なきを以て行軍に依り轉進せられ度
し一との電話通報を受け、直ちに計畫を變更し別紙要圖第二の如
く二縱隊となりて轉進を開始す（洮南出發十三日零時）。

7. 左縱隊は極力列車を利用し十四日大營にその大部到着す。第八十
七旅團長は電話に依り綏東軍と交渉し師團主力の列車輸送を懇請
せるもの如し。

8. 師團主力縱隊は十五日朝平安營（大營西方五河）に到着、同地に
於て DTL 無線に依り停戦を知る。

9. 師團の行軍間敵機の行動活潑ならず。十三日晝間及十四日夜我が
上空を旋回（照明彈投下）せるも攻撃を受けず（十三、十四日は
雨又は曇）。

10. 北支より滿洲に再進中の歩兵二大隊は天津附近に於て終戦を知れるものの如し、

第三終戦後の状況

1. 停戦を知ると共に師團主力を勉めて列車輸送すべく努力しその大部を新京地區に集結すべく處置す。

2. 師團長及幕僚其他所屬の者は新京に先行し十六日早朝關東軍總司令部に到着し連絡の結果師團を公主嶺に集結するに決す。

3. 鐵道輸送に依り公主嶺に輸送を開始せるも蘇軍の進入に依り一部(2041大Aの一部、P一中、DTL)を新京に残置せざるを得ざる状況となり

なり新京、公主嶺の兩地區に於て武装解除せらる。

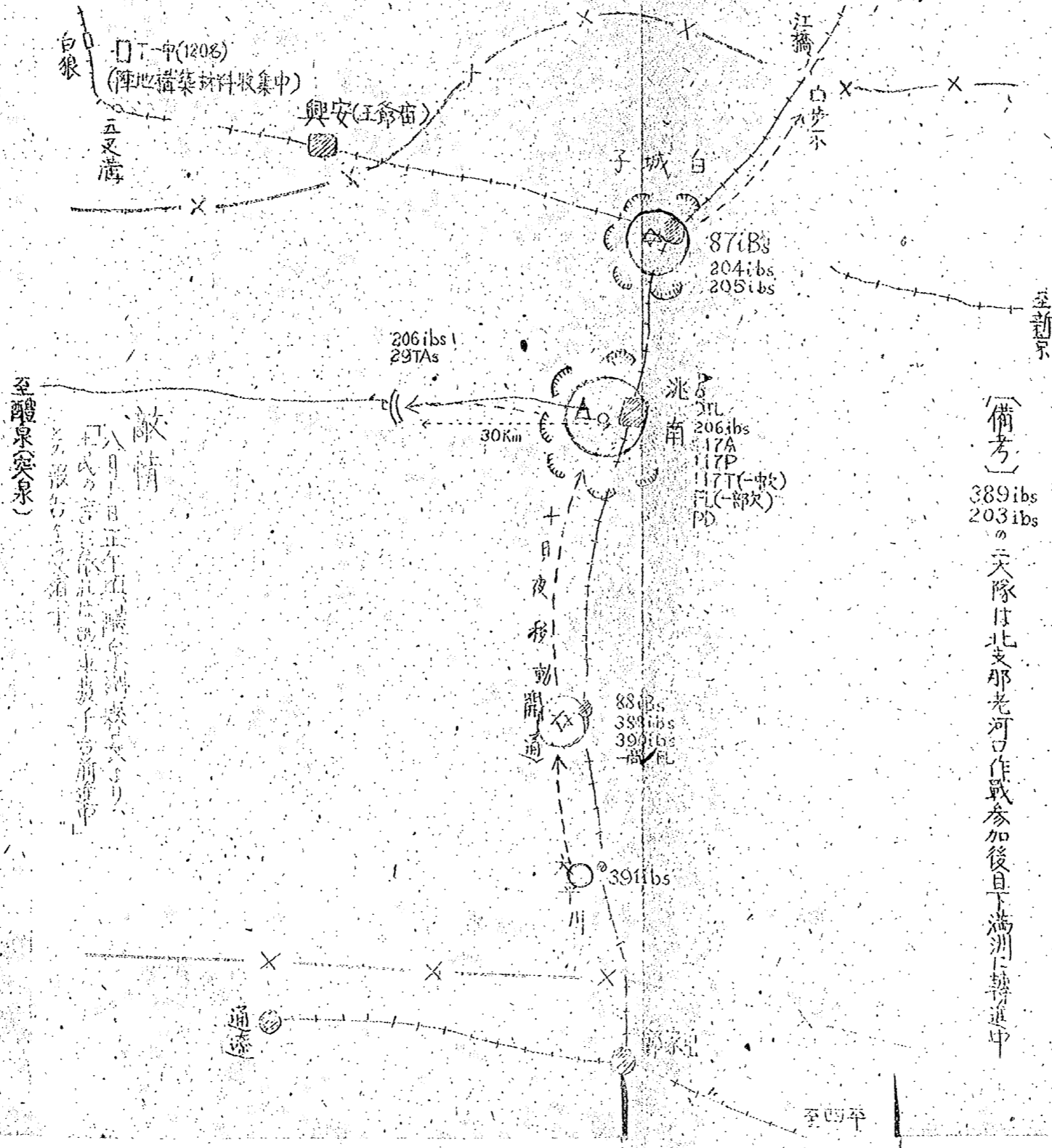
4. 北支より轉進中の歩兵二大隊は十八日新京に到着し十九日公主嶺に逆輸送せられ公主嶺に於て武装解除せられたり。

0626

第十七師團態勢要圖

(自昭和二十年八月五日頃 至蘇聯參戰當時)

第一圖

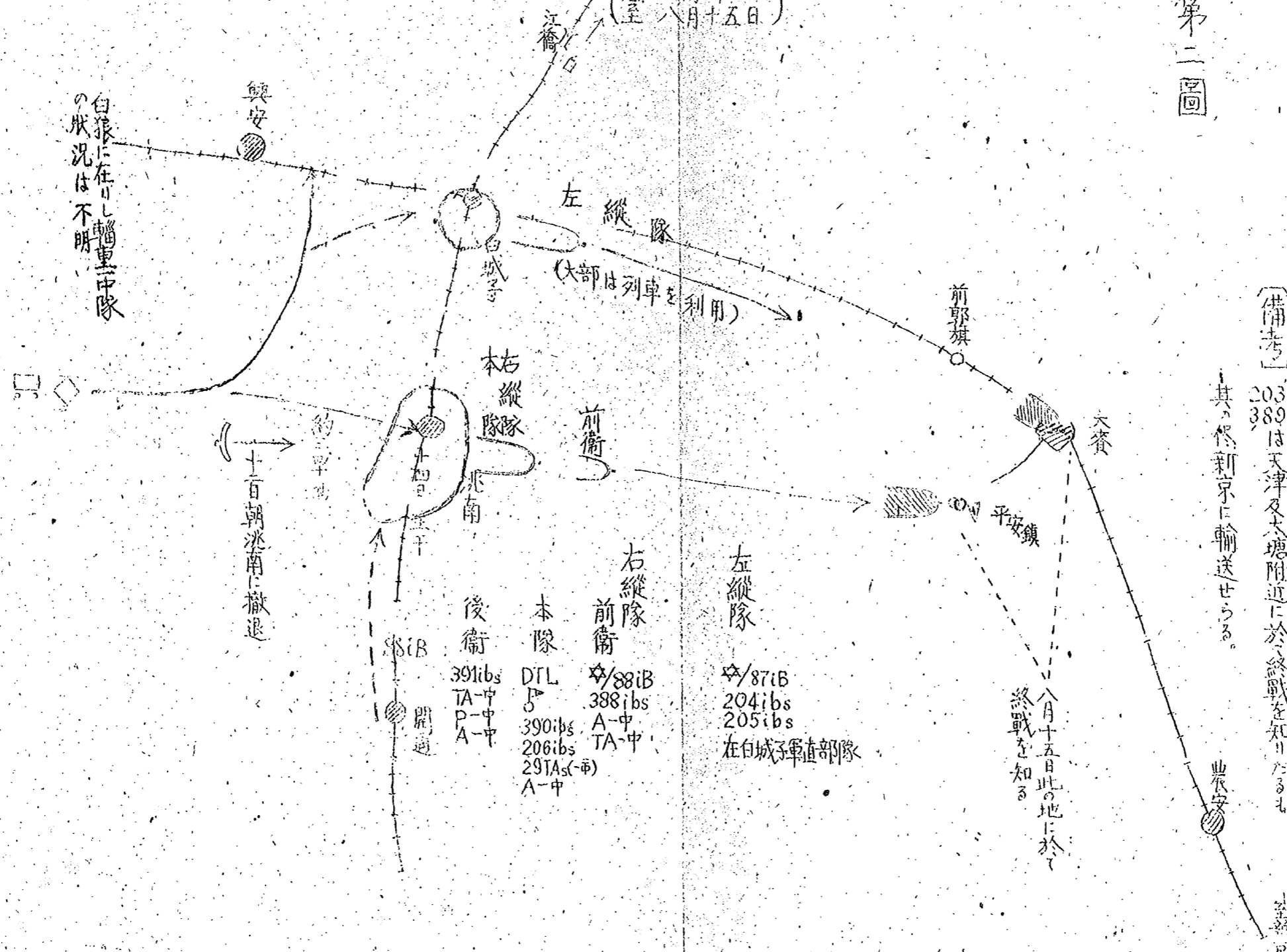


0627

第十七師團態勢要圖

(自八月十五日)
(至八月十五日)

第二圖



〔備考〕

203ibs
389ibs

天津及大塘附近に於て終戦を知りたるも

其、終新京に輸送せらる。

0628

第十七師團行動要圖

(自八月十五日
至武裝解除)

第三圖

